南タイ農村民の村外居住体験について --タイ・イスラム村落におけるケース・スタディー

矢 野 暢*

Southern Thai Muslims' Temporary Residence Outside Their Villages: A Case Study

by

Toru Yano

This is the third of the serial articles titled "Socio-Economic Basis of Social Communication in Southern Thailand," the first of which was published in Vol. 4, No. 5 of this Journal as "Land Tenure in Southern Thailand" and the second, as "Range of Marriage in Southern Thailand" in Vol. 7, No. 4.

On the premise that the process of social mobilization of a community of settled agriculture type has much to do with experiences of temporary off-the-village residence of its members, this article aims to present different types of temporary external residence of villagers of a Thai-Islam community in Southern Thailand.

Actual cases of off-the-village residence are classifiable into three categories as follows: 1) cases due to religious motivation, 2) cases attributable to economic motivation, 3) cases invoked by order of the government. The first of these categories is socially institutionalized as pilgrimage to Mecca and schooling at a "Pono". The second category includes those cases of working away from home like squatting or engaging in jobs outside the village. The last category means conscribed military and constabulary services.

While, in Part I, the author tries to give factual ideas on the institutional aspects of those cases, motivational aspects as well as relevance to socialization of villagers are clarified in Part II as the author presents informations collected through interviews of the villagers.

はじめに

本稿は、先に執筆した「南タイの土地所有――タイ・イスラム村落におけるケース・スタディ――」(本誌 4 巻 5 号掲載)および「南タイにおける通婚圏の形成――タイ・イスラム村落におけるケース・スタディ――」(本誌 7 巻 4 号掲載)に続いて、南タイにおける politico-social

^{*} 広島大学政経学部

communication の社会的・経済的基礎を探る試みである。

これまで、土地所有制度と通婚圏の形成という、人口の流動を左右するもっとも基本的なファクターについて分析を行なってきたが、それらと並んで、より個別的ではあるが、現地住民が本来の村落を離れて、比較的長期間、村外生活・居住体験をもつ機会がある事実を見落とすことはできない。ここで問題にする村外居住の諸機会は、通婚圏の場合と異なり、いわば一時的な離村現象をいうわけであり、必ずいずれは当事者たちが帰村する場合にのみ限られる。これら諸機会は、社会文化のうえでいわば制度化されている場合もあれば、そうでない場合もある。いずれにせよ、南タイ農村がおしなべていわゆる定着農業型社会である点を考えるならば、それらの諸機会が、村民を外界との新たな接触に導き、ひいては文化伝播の契機がつくられることにもなることがわかる。

まずとりあえず、一つの手掛りを得るために、ドーン・キレク村(人口男714、女642、計1,356人)の住民に、遠隔地旅行経験の有無を問うた結果を表示してみよう。男109名、女5名、計114

			国		外	•				国	ď]	他		県			- 	県	内他	郡
旅	ξ ;	メ	ア	~	ケ	<i>ب</i> ج	マ	レノ	•	ラム	圈内		タイ	文	化	圏 内]		チ	テ	- 1)-
行	r		1		ラ	ダ ン	Í	٠,	ヤ	#	ナラ	バ	ナコ	۶,	ŀ	プ	ŋ			1	
		ツ	ルス	ナ	ン	~: 1	2	z !	ラ	トウ	ー テ	ン	ター マン	タ	ラ	ケ	ラ	:	+	۶,	ダ
先	<u>.</u>	カ	タ	ン	タン	-1)-	3	=	,	1	ワイー	コク	ラシー	ルン	ン		ار ا		-)-	1	±4*
件	男	14	16	15	1	1	3	7	22	2	21	6	17	8	5	3	2		4	3	1
数	女	5	0	2	0	0		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		0	0	0

表 1 遠隔地旅行経験者行き先別延べ人数

注)本表は「どこか遠い所に旅行したことがあるか」という質問にたいする村民の解答をまとめた ものである。ふつう県内他郡のサダオなどは「遠い所」とはみなされないので、県内他郡その 他比較的近い地域の箇所の件数はほんとうはもっと多いはずである。

名が遠隔地旅行経験を有することが判明したが、それを行き先別にわけてみたものが表1である。同一人が複数箇所の行き先を答えた場合もあるため、表1の合計人数は114名を越える。旅行先の列挙は解答者の自由にまかせたので、途中経由地点が含まれていることもありうるし、また遠隔地の定義も解答者まかせであるので、たとえば県内他郡を遠隔地とは判断せず、解答に含めなかったものも多数いよう。その点で、表1からはおおよその趨勢が知られるにすぎない。

それにしても、ドーン・キレク村民が、相当度に遠隔地旅行・居住を経験していることは明白な事実である。どのような具体的契機によって、このような村外への短期移動が現象化するかを考えてみることが、本稿の主たる課題である。

東南アジア研究 8巻2号

遠隔地への地理的移動の現実的基盤として、姻縁関係の遠隔地への拡大を考えてみることは 無益とはいえない。しかし、事実問題として、そのような特定の社会関係とは直接には無関係 に、遠隔地への移動が生じうるところに問題の難しさがある。そこで、ここでは、むしろ地理 的移動を現象化せしめる機会源それ自体を重視してみなくてはならない。もとより、これらの 地理的流動化を側面的に助長する要因として、村落あるいは家族の権威的枠のゆるさというこ とが考えられる。この問題については、別の機会にそれだけを主題として語りたいと思う。

機会源は、村外に赴く事由あるいは動機の違いに応じて、いくつかの種類にわかたれうる。 ここでは、とりあえず、次の3種類にわけておきたい。

- (A) 宗教的動機に基づく場合
- (B) 経済的動機に基づく場合
- (C) 公権力の発動に基づく場合

この三つのそれぞれの場合について、離村の具体的動機、離村者にみられる経済的・社会的条件との相関性、離村に伴われる文化的・儀式的側面、また村外居住全般にみられる特徴やその変化、などを分析してみなくてはならない。

村外居住の諸経験については、その機会源を求めるだけでは足らない。村外居住体験を問題にする積極的な理由は、とりもなおさずそれらが新たな socialization の行なわれる機会として重視されらるからにほかならない。定着農業型社会の近代化は、ある段階においては、ラーナー (Daniel Lerner) のいわゆる mobile personality¹⁾を一つの価値として志向する過程を含むものである。この観点からみるならば、村外居住の諸機会を論ずる場合、機会源と並んで、社会的学習の諸局面について考察を加えることが不可欠の課題となる。

本稿の後半では、この趣旨に従って、村外居住経験者のなかから、機会源別に、無作為に幾人か抽出して面接を行なった結果をごく簡単にまとめて分析してみたい。その場合、社会的学習の総合的・構造的分析は筆者の手に余るので、とりあえず村外居住中の生活体験の具体的諸様相に焦点をしぼり、そこにみられるきわだった傾向を捉えるだけに留めたい。

| 村外居住の諸機会源

A 宗教的動機に基づく場合

ドーン・キレクは、純然たるムスリム村落であり、全世帯数 297 戸のうちに仏教徒の世帯は 1戸も含まれていない。イスラムを信仰する限り、メッカ巡礼などの遠隔地旅行滞在の機会 は、いわば社会的に制度化されているわけで、その点ムスリムは村外体験の機会にアプリオリ に恵まれているといえよう。メッカ巡礼以外の機会源としては、イスラムを集中的に学ぶため に行なわれる遠隔地留学の制度がある。

¹⁾ cf. Daniel Lerner. The Passing of Traditional Society. 1958, pp. 47~52.

宗教的動機に基づく場合の特徴は、地理的移動が社会制度化している点であるが、制度化していることによって、移動に伴われる様式上の変化に乏しく、またイスラム社会しかも村落単位での宗教秩序の安定を前提としている点で、いわば保守的な性格のものである。とりあえず、ドーン・キレクにおけるメッカ巡礼とボノ留学の二つについて分析を加えてみよう。

1 メッカ巡礼

ドーン・キレク村には、筆者の調査終了の段階(1966年3月)で、「ハジー」の称号を有する村民、すなわちメッカ巡礼(kaan-tham hajii)の経験者が、 男14人、 女5人あわせて19人 現存していた。(表2参照)

ドーン・キレクがムスリム村落である以上、メッカ巡礼経験者がいるのは不思議なことではない。 そしてメッカ 巡礼に 赴く 宗教上の動機は、いうまでもなくイスラムの五行 (haa siin

項目	ld.	年	齡		土地	保有	親類内
例	性	現在	巡礼時	同行者数	区画数	総面積(ライ)	ハジー
1	m	51	40	2	4(-)	8(-)	2
2	m	45	31	1	6(-)	17(+)	0
3	m	45	3 9	3	11(+)	41(+)	3
4	m	38	3 2	3	5(-)	12(-)	3
5	m	38	36	2	5 (-)	18(+)	} 4
6	f	38	36	2) 3(-)	10(+)	} 4
7	m	42	24	2	4(-)	6(-)	2
8	m	66	34	1	4(-)	9(-)	7
9	m	5 0	18		} 5(−)	10(-)	} 5
10	f	42	36	3) 3()	10()	5
11	m	48	33		2(-)	24(+)	4
12	f	76	?	1 ?	7(+)	19(+)	?
13	m	35	22	1	3(-)	13(+)	4
14	m	36	34	2	6(-)	16(+)	3
15	m	58	55	1	5 (-)	9(-)	} 4
16	f	42	3 9	1	3(-)	9(-)	f 4
17	m	61	23	2	8(+)	25(+)	2
18	m	51	51	1	} 7(+)	20(+)	} ?
19	f	49	49	1	(+)	20(+)	Ţ

表2 ハジーに関する諸データ

- 注) 1. 土地保有の箇所の(+)(-)は、数値がドーン・キレク平均より 高いか低いかを示すためのものである。
 - 2. 表中の例 5 と例 6 ,例 9 と例 10 ,例 15 と例 16 ,例 18 と例 19はそれぞれ夫婦である。ただし例 9 と例 10の夫婦の場合,2 人が別々に巡礼しているのは興味深い。
 - 3. 同行者は、ドーン・キレクからの同行者数を示す。

itsalaam)の完成である。しかし、メッカ巡礼は、村民の社会通念上は、かならずしも絶対に行なわねばならないこととは考えられておらず、アッラー信仰 (nǔk cao)、礼拝 (tham mayan)、施与税 (zakat)、断食 (buat)の四行を遵守することでムスリムの宗教的義務は十分に満たされるとされている。もっとも、ある水準以上の富の所有者は、巡礼を行なうことが宗教的義務として当然視される。この場合、富とは、いうまでもなく現金もしくは現金に換えうる資産の所有をいう。

しかし、メッカ巡礼を行なう動機を別の角度から捉えてみると、タイ・イスラム社会の住民の社会心理を顕著に特徴づけるものとして、thaana の意識の存在が気付かれる。この thaana は、内面的な宗教倫理とは無縁の概念であって、現世的な社会関係の階梯的秩序を前提とするいわゆる「格」の概念に類似している。ただし、より具体的な地位や身分を予定することが多い。いずれにせよ、thaana は、高(suung)・低(tam)という形容のまつわる相対的概念であり、尊敬(khwaam-napthǔǔ)あるいは資格(khwaam-somkhuan)などの社会的価値と直接結びつく社会的概念である。南タイではムスリムのムスリムとしての人格的完成は、ふつうこの thaana の論理で説明づけられる。ハジーの称号を得ることによって、いちおう最高のthaana を獲得し、それ相応の尊敬と資格とを得ることができると考えられるのである。

逆に、メッカ巡礼を躊躇する動機としては、経済的考慮はいうまでもないとして、そのほかに、知識、学識が欠けているという自己判定、および、遠国への旅行に伴われがちな不便や危険あるいは死の可能性を怖れる心理がある。特に、50~60年以前にこの村からメッカに赴いたものが一度ならず旅行中途に死んだ事実を記憶に留める高齢者には、死を恐怖する心理が消えてはいない。

表2を検討すると、まず巡礼に赴く年齢が30才台にもっとも多く集中していることが目につく。原則として、メッカ巡礼は、割礼を終えた後はどの年齢でも行なうことが許されている。しかし、後に述べるように、巡礼を行ないうる資格として、社会通念上、ある水準の学識を備えることが重視されるために、10台、20台は早期に過ぎると考えられる場合が多いわけである。と同時に、長旅に耐えうる健康のことを配慮すると、50才以上の高齢者はむしろ躊躇する傾向が否めない。イマムその他の村の宗教組織上の役職につくのは40台が多いことも一つの要因であるだろう。しかし、むろん、この年齢の問題は、そもそも相対的な制約を受けるものでしかなく、イスラムを学んで有能なる若者は20台にも赴きうるし、旅行条件の改善と共に、高齢者の旅行頻度も高まりうるのである。

19人のハジーのうち、2親等内の血縁者にハジーがいるものは10人、またひろく親類縁者 (yaat phii noong) にハジーがいるものは、16人を数える。つまり、親類縁者にハジーを有しないものは3人でしかない。この事実が何を意味するかは、細かい分析検討を加えねばならないことには結論を下しかねるが、いずれにせよ、メッカ巡礼を重視する気風が、ある水準の経

済的条件と並んで、特定の縁筋にそって継承されているとおぼしき事実は興味深い。

ところで、いうまでもなく、メッカ巡礼旅行は、多大な財政的負担を必要とする。従って、他のどの要件よりも、世帯の経済力がメッカ巡礼の成否の基本的要件になると考えられる。ところが、表2の土地保有の項目を検討すると、興味深いことに必ずしもすべてのハジーの土地保有がドーン・キレクの平均保有量なを超えているとは限らないことがわかる。後に述べるように、巡礼前後に土地の売却が行なわれた事実が1例しかないことから判断して、土地保有量が巡礼後に著しく減少したとは考えられない。ただ例8だけが、ある程度高齢者であり、子供に生前分割を行なった可能性があるとも考えられたが、調べてみても、そのような事実はない。

こうしてみると、土地保有もまた、かならずしも決定的な要件をなすとは限らないことがわかる。あるいは単なる土地保有量に留まらない、土地の生産性や労働力、技術水準などを含めた総合的な世帯の経済力を考える必要があろうが、いずれにしても、以下に指摘するように、経済的要件がすべてではないのである。つまり、財政的裏付けはなくてはならないが、圧倒的な富の水準はかならずしも必要ではない。

村民の抱く社会通念によると、メッカ巡礼を行なう者は、富以外に学識(khwaam-ruu)あるいは人格(khwaam-pen khon dii)という条件を備えねばならない。メッカ巡礼を行なわなかった老人に、「なぜ巡礼をしないのか」ときくと、たいてい「知識がないから(phro waa mai mii khwaam-ruu)」とか「教育がないから(phro waa mai ruu nansǔǔ)」と答える。それというのも、メッカ巡礼の儀式的・手続き的局面をみるとすぐわかるように、一種の互助(chuailǔa kan)の制度に基づいて旅立ちの準備が行なわれるからであり、その意味で、村民の間での信望は不可欠の要件となるのである。また、望ましくは、本人が豊かであるだけでなく、親類縁者の多くが裕福であり、しかもそれらとの日常的な交際が保たれていないといけない。いずれにせよ、ムスリムとしての学識がある水準に達することが村民の信望をうむわけだが、そこで、メッカ巡礼以前に、ボノ留学を経験しているハジーの比率は 通常ひじょうに高い。表2の19人中、4人を除いてことごとくボノ留学を経験しており、しかも、遠隔地の都市部で長期に及んでイスラムを学習したものが日立っている(たとえば例7はアロールスターで11年、例13はチャナで8年など。これらはドーン・キレク村民の留学例としては異例に長い)。ここで、メッカ旅行の儀式的・手続き的局面を検討しておこう。

メッカ巡礼を決断するのは、あくまでも巡礼を行なう主体である。もし本人が世帯の戸主である場合、家族の同意を求める必要はないが、戸主でない場合には、戸主(すなわち父親もしくは夫)の同意が不可欠である。しかし通常は、巡礼を決める前に誰しも身近な親戚(それも男性)と相談する。イマムやハジーの事前の同意や許可は必要とは考えられない。ただし、金

²⁾ドーン・キレクの平均土地保有量は,平均区画数6.5箇所,平均保有面積12.8ライである。

曜日の礼拝集会(pracum)に村民が一堂に集う機会に、イマムから「〇〇がメッカ巡礼を行なうので、献金に協力してほしい」と通達してもらう便宜を求めるならば、イマムに事前に意思を伝達しておく必要がある。巡礼を決断するのは旅立ちの1年前というケースがもっとも多い(19例中10年前が1人、5年前が2人、2年前が1人で、残りはすべて約1年前に最終的決定を下している)。

通常, 巡礼経費総額のおよそ 半分 (経費総額は 現在の 相場では, 夫婦 一組で 行くとして 20,000バーツ, 単身の場合は10,000バーツ。 その半額だから, 10,000あるいは5,000バーツと なる。) が負担できる見極めがついた時に, メッカ巡礼を行なう決意がなされる。 そしてそれ から旅立ちまでのおよそ 1 年間は, 残る半額(約 10,000ないし5,000 バーツ)の資金調達にあてられる。

この期間中に行なわれる資金調達の方便としては、次の5通りが行なわれらる。

(1) 募金 (kaan-khəə bia-boricaak)

表紙に自らの巡礼の意向を記した封筒 (baai watcana khoong roosuulutlo) (写真1) を, 遠近を問わず各地のイスラム村落に配り,

を元を向わりを記めてスクム内谷に配り、 それにいくばくかの現金を入れてもらって回収して、代償なしの献金(tham bun)を求めるもの。本人および家族による戸別訪問という形をとる場合もある。 表紙に印刷される書式には一定のパターンがあり、そして本人の写真が掲げられることが多い。この方法は、印刷・配布に手間がかかる上に、確実に資金を集めるやり方としては不適当でもあるため、ドーン・キレク住民はこれをあまり行なわない。



写真1 メッカ巡礼のための募金封筒 (baai watcana khoong roosuulutlo) 実物 9 cm×14.5 cm

(2) 物品配布 (kaan-cɛɛk sapsin lek nɔɔi)

アルマイト皿とかスカーフなど安価なもの(1 バーツ程度のもの)を村の内外のムスリム世帯に(時には仏教徒の世界にも)くまなく配布し、価格の3~5 倍程度の献金(tham bun)を得る方法。しかし、もっとも頻繁に行なわれるのは、牛肉の配布である。牛を1~2頭殺して、その肉を少量ずつ各世帯に配布し(写真2)、市場での相当価格相場の2~3 倍程度の献金を得る。牛肉の配布は、募金目標額が満たされるまで一度ならず繰り返されうる。重要なことは、いずれの場合にせよ、親類縁者は、献金額が通常村民よりはるかに多くて、1 戸につき100~300バーツを献金しなくてはならない点である。

(3) 招宴 (kaan-kin liang)

結婚式の祝宴と同一の様式にて、ふつう出発の日が近づいてから行なわれるもの。招宴の前日に牛を殺し、当日に備える。メッカに行く本人が数日前から村の内外のムスリムの家いえを訪れて、招宴のことを伝えて歩く。県内他地域にて、印刷物(12 cm×8 cmのカード)を事前に配布することも行なわれうるが、ドーン・キレクではその例をみない。当日、訪れた客に型通りの食事を提供して、1人2~3バーツ以上の献金を受ける。招宴は、原則として1度だけ行なわれる。



写真 2 村民に分配するため、牛肉を約 400g ずつにわけている情景。肉はつた類を 通してぶらさげられるように固まりの ままである。

(4) 借金 (kaan-khoo djuum ngən)

文字通りの借金であるが、土地を抵当に (dooi camnam thiidin) 単一の人間から多額の金を借りる場合と、複数の人間(主として親戚)から無担保で少額のかねを借りる場合とがありうる。

(5) 土地売却 (kaan-khaai thiidin)

ドーン・キレクの住民は、メッカ巡礼のためにあえて土地を売却することを好まず、その実 例を見ない。

表3は、表2に掲げた19人について、不完全なものながら、巡礼経費総額とその調達方法とのおおよそを調べたものである。例18と例19の夫妻は、筆者の調査期間中に巡礼の準備期間に入ったため、詳細に調査することができ、その期間に行なわれた準備の態様はおよそ次の通りであった。

- 4月上旬 牛が1頭殺され,その肉が約50世帯の親戚に配られ,1戸100バーツ平均の献金が行なわれる。
- 4月中旬 1個1バーツの皿が村の内外(仏教徒も含む)に配られ、それにたいして最低5 バーツの献金が行なわれる。
- 5月下旬 牛が1頭殺され、その肉が少量ずつ村中に配られ、1戸3~10バーツの献金が返される。
- 11月 船会社に旅費が支払われる。3)

翌年2月上旬 牛を1頭殺して招宴が行なわれる。

³⁾ 旅行手続きは、いっさい専門旅行会社の代理店(南タイではThai Pilgrim Co. Ltd. などの支店が近くのハジャイにあり、繁盛している)が代行して行ない、4ヵ月に及ぶ道中の世話も代理店の者が行なう。代理店の者が付まで来て、旅費の取立て(出発3ヵ月前)や事務連絡を行なう。

東南アジア研究 8巻2号

項目	総 経 費 (バーツ)	土地売却	牛殺し	物 品 配 布
1	10, 000	+	+	
2	10, 000		+	
3	12, 000	-	+	
4	10, 000	_	+	皿,水くみ容器
5	20,000		+	 皿,マッチ,水くみ容器
6	,			
7	9, 700		+	
8	1, 000	_	?	野茶
9	600	土地抵当	+	
10	10, 000	_	+	
11	10,000	_	+	
12	?	?	. 3	
13	15, 000		+	
14	10, 000		+	
15	20,000	-1-46-t C -V/	1.	m
16	20,000	土地抵当	+	<u> </u>
17	500	-	+	スカーフ
18	20,000	_	+	
19	J 20,000	_		ши

表3 巡礼費用調達のデータ (表2参照)

注) 表中の+, -はそれぞれ該当の有無を示す。

同 2月下旬 家出の儀式(後述)を行なう。

同 2月末 メッカに向け出発。

献金は要求されたら拒否できないが、金額は献金する者の判断に委ねられる。結局、この間に、村の各世帯および村外派生村の多くの世帯から最高300バーツ最低3バーツの献金がなされ、純益総額8,000バーツが調達された。自己準備金が10,000バーツちょうどであったため、あと2,000バーツが不足すると判断されて、数人の親戚から無担保で計2,000バーツの借金がなされた。(表4参照)

その他,準備期間中には、早期に同行者が村の内外で求められるが、男性の場合,知人の同行なしで行くことももちろんありうる。女性の巡礼は既婚女性に限られている。夫と同行する

	目	項		出		支			源	金	資
11, 000	費)			(旅	411	上支払		旅行	10,000	金	自己資
3, 000	惟費)	での幹	ッカ	(メ		,	1		0	却	上地売
3,000	分)	換金	貨	(外	金	持	苻	携	2,000	: 入	無担保借
3, 000	照)	参	5	(表	備	準	発	出	8,000	金	獸
20, 000						†	i		20, 000		計

表4 巡礼経費の収支概算

表 5	メッカ旅行に携帯される物品リスト	(夫妻の例)
-----	------------------	--------

1	食料品		▼ 数	Ø	日常用品	
	米	50 <i>l</i>	1) 夫用		素焼水鉢	2 個
	乾肉	2kg	p haathung	4 着	平鍋	1 個
	乾魚 8パーツ	相当分	上衣	5着	湯わかし	1 個
	乾麵	0. 5kg	p haahom	3枚	水くみ容器	2 個
	塩	1 ℓ	ズボン	1着	水筒	1 個
	砂糖	4kg	靴	2 足	.III.	6枚
	kapi	1kg	2) 妻用		pintoo	2個
	som makhaam	$1 \mathrm{kg}$	p haath u ng	6 着	油入れ	1個
	luuk som	50粒	phaahom	4枚	さじ	2本
	luuk djii	3kg	上衣	4 着	包丁	1本
	菓子(2種)	若干量	乳あて	2 着	懐中電燈	1 個
			靴	1足	薬品(3種)	若干量
			手持ちバッグ	1 個	書籍(コーラン	∕等)数Ⅲ

のがふつうであり、ごく稀に、他の男性と同行した例をみる。(例10)

例18・19の夫妻が巡礼のために準備し、旅行に携帯・持参した物品目を表5に掲げる。

巡礼に出発するに際しては、家出の儀式 (phithii long baan) を行なわねばならない。出発日の当日行なうこともできるが通常2~7日前に行なり。儀式を行なうべき日時は、精霊祈禱師

(moo phii) が定めるが、土曜日は敬遠される。本人および荷物が、イマムあるいは長老のハジーとの会食、コーランの 導唱(nam aan kuran)および礼拝(写真3)のあと、家から送り出される。いったん儀式が完了すると自宅に足を踏み入れることはメッカより帰村するまではもはや禁忌とされ、出発までは近所の家で寝泊りをし、食事は自宅の床下かあるいは泊っている家に運ばせて採らねばならない。



写真3 メッカ巡礼に赴く若い男を囲んで、コーラン導唱が行なわれている情景。

メッカ巡礼の見送り(kaan-song yaat pai mekka)は、慣習化している。親きょうだいや親戚の旅立ちを、時間的・財政的余裕のあるものが船の出る港まで見送ることは、義務づけられてはいないが、望ましいと考えられている。事実、ペナンやナラーティワートまで親戚の者を見送りに行った経験をもつ村民は少なくない。しかし、見送りは、男性にのみ限られていて、女性の巡礼の場合でも、女性が遠隔地まで見送りに赴くことはない。

2 ポ ノ 留 学

ドーン・キレク住民の村外留学の機会を考察してみると、初等教育 prathom 4年制よりう

えの上級学校(mathayom 7年以上)で学ぶ者はひとりもいなくて、従って都市の普通学校への通学・留学を問題にすることはできない。ドーン・キレク村民の村外留学は、宗教的動機に基づくポノ(pono)すなわち私設イスラム学習塾への留学に限られる。49

ポノは、法律的には、イスラム教徒であれば、郡の教育課に登録することを条件に、だれでも開設することを許されている。しかし、ポノの開設を行なうものは、宗教上の学識・識見が豊かと考えられ、周辺ムスリム住民のあいだで信望の厚い(naa napthǔǔ)人物でなければならない。もし、信望のないものがかりに開設を決意したとしても、開設までもって行くことも、塾生(nakrian pono)を集めることも望めない。ポノの教師(to-khruu)の社会的な thaanaと威信は、ふつう、イマム一般より高く、従って、社会的定評において、イマムの水準を越えることが評価の一つのメドとなる。いずれにせよ、ポノの開設は、その意味で大きな冒険を伴うのである。

ポノの開設は、通常、1人ないし複数(南タイでは多くて3人)のハジーの主体的決断に基づいてなされる。自らの土地に塾の建物を建築する場合は少なく、多くの場合、富裕な土地保有者から無償・無期限借地の便宜を受けて建築が行なわれる。建築には、地元民から資材・労働力の無償提供を求めることができるが、地元民は、これを拒むこともできる。ポノで学びたいものは、塾舎の周辺の空地に自ら小屋を建て、そこを宿舎としなければならない。(写真4)古いポノの場合は、先住者の残した空小屋を利用することができる。1戸に2人の塾生が住むしきたりである。ポノは、こうして、教室、教師の自宅、塾生の宿舎、の少なくとも三つの要素よりなり、この三つが一つの区画にまとまって存在する。

ポノは、すべてのムスリム村落に一つずつあるのが理想とされているが、現在ソンクラー県 (ムスリム村落総数は169)には、約60のポノ

しかない。県外とくにパターニー、ヤラーの両県のポノは威信が高く、ソンクラー県よりもむしろ遠隔地で学ぶことが望ましいとする風潮も強く、その意味では、むしろ60は妥当な数かもしれない。

ポノの存在は、南タイのムスリム社会では、 不可欠である。それには、実際的な理由がある。第1に、公立学校のカリキュラムが、イ



写真 4 ポノ塾生たちの宿舎 (ソンクラー県チャナ郡にて撮影)。

^{4) 「}ポノ」は、マレイ語の pondok の訛ったものだが、タイの関係官庁の用いる正式公用語である。 cf. "Ratchanii": "Pono" in Withayaasaan, pii thii 17, chabap thii 31 (B. E. 2509. 8. 15), pp. 20~21. いわゆる南タイムスリム 4 県(パターニー、ヤラー、ナラーティワート、サトゥーン)にも多くのポノがあるが、学習内容その他についてタイ官憲から厳重な規制を受けている。ソンクラー県の場合、その点異なった扱いを受けている。

スラム教育をまったく無視していることである。そこで、南タイのムスリムにとって、公立学校では義務教育年限だけ学び、なるべく早期にイスラム教育を受けうるポノに子弟を送ることが必要となる。事実、ドーン・キレク初等学校(学習年限 4 年)は、教師はすべて仏教徒、生徒は仏教徒とムスリムと半々で構成され、仏教色に満ちた教材が用いられている。そこでの教育はいうまでもなく仏教徒中心に傾きがちである。

第2に、ポノでの学習以外に、正統的なイスラム教育を受ける機会に乏しい。従って、ムスリムとしての高い社会的 thaana に達するためには、ボノに留学すべきだとする古来の社会通念がある。ポノの塾生あるいはポノで学んだことのあるものは、半球型の白帽をかぶり、その経験を誇示する。メッカ巡礼に赴く暗黙の資格を身につけるために、その前段階としてポノに留学するものは少なくない。

いずれにせよポノの存在は南タイのイスラム社会にとって不可欠の制度となっている。ポノでの学習のしくみをみると、ポノの開設者がそのまま教師となって、正式の祈禱方法の教授、コーランあるいはイスラム法の講義、およびアラビア語、マレイ語の読み書きを教える語学教育がなされる。時間割は、3時間制(たとえば、ある例では5:30 A.M.—7:00 A.M., 8:30 A.M.—12:00 A.M., 2:00 P.M. — 4:30 P.M.) の場合と 2時間制(たとえば 7:00 A.M. —12:00 A.M., 3:00 P.M.—6:00 P.M.) の場合とがある。試験はいっさいなく、学習の変化のない繰り返しが行なわれる。塾生は、先に述べた通り、粗末な小屋に 2人1 組で住まい、自炊を行なう(米は自宅より運び、魚・野菜等は近くの定期市で買う)。ボノ留学中は、禁煙、禁酒などのほか、女性との会話・接触、映画見物、賭事などが厳重に禁じられる。塾によっては、散髪を禁ずるところもある。禁止事項を犯した場合は、爾後留学を禁じられ、帰村を命ぜられる。教師への謝礼としては、原則として、年に一度、米を提供する。筆者があるボノで観察した例では、塾生の親たちが、皆で持ち寄った米を大きなかごに積み、近所を練り歩いたあと、

教師の自宅の納屋に運び込んだ。(写真5) その日の日付は3月30日で、この年のザカート・フィトロ納付日後、ひと月と28日目にあたり、ザカートがと直接関係あるとは判断できなかった。地元民は、その日を「教師にブンを施す日(wan tham bun to-khruu)」と称していた。むろん、ポノの教師のほうで、ザカートが各村で納められる日もしくはその直後に、塾生の出身村その他をまわり歩いて、



写真5 美しく飾られたかごがポノの入口から 運び込まれる光景(ソンクラー市郡ク ロンルク村のポノにて撮影)。

⁵⁾ 南タイのムスリムは、この種のザカートをフィトロ (fitro) と略称し、その対象としての教師を khon son saatsanaa, 塾生を khon pake として、範疇化している。

ザカートを受ける資格をもつ。通常、1戸から2~3リアン⁶⁾ の喜捨を受ける。同時に、ポノに 学ぶ塾生たちもまた、ザカートを受ける資格をもつ。教師への謝礼は、このように基本的には 米で支払われるが、それに加えて金納の行なわれるケースが、しだいにふつうになってきてい る。ソンクラー県でも、月に5~20バーツの支払いを要求するポノは増えているときく。

ポノの一般論的扱いはこのくらいにして、ドーン・キレク住民のポノ留学にみられる傾向を みてみよう。

かつて、このドーン・キレクにも、ポノが開設されたことがあった。表 2 (p.141) に例 7 として掲げられている男は、アロールスターのポノに11年留学したあと、24才でメッカ巡礼を行なったが、34才の時に村の一隅に土地を無償で借り、ポノを開いた。その後 4~5 年続いたが、男がポノの敷地内の土砂を地主に無断で売却したので、地主が怒って土地の明け渡しを要求したため、ある日突然ポノは閉鎖されることになった。その後、ポノは再開されないまま、今日に至っている。

この男は、現在、村の第4聚落の小祈禱堂(balai)を利用して、初等学校在学中および卒業済の子供たちに、宗教教育を施し、1人当り月に5バーツの謝礼を得ているが、これは厳密な意味でポノと呼ぶことはできない。従って、ドーン・キレク村民は、村の外にポノを求めねばならなくなっている。

一般に、ポノの評価は、教師の学識についての定評できまり、そしてこの評価は口伝えで各地に伝播する。村民は、各地のポノの定評にくわしく、良し悪しの序列をつけるのが常である。その場合、興味深いことに、パターニー市に所在するポノが最良の評価を受け、次いで県内チャナ郡に所在する2~3のポノが高い序列に据えられる。ドーン・キレクから派生した近くの村外ムスリム聚落にもポノがあるが、評価は必ずしも高くない。

しかし、このように遠隔地嗜好ともいうべき評価の傾向と、実際に村民が留学地として選ぶ場所とは必ずしも合致せず、すべてのものがパターニー 県やチャナ郡に 留学するわけではない。逆に評価の低いポノがつとめて敬遠される傾向があるわけでもない。ふつう、ポノの選択には、親の側での経済的考慮その他の実際的な要因が働き、必ずしも一、二のポノに集中する傾向がみられるわけではない。

表6は、ドーン・キレク5聚落のうち、第1、第4、第5の3聚落の世帯主計201名(内調査不能5名)に面接した結果を表示したものであって、年齢層別に留学先を調べたものである。若い世代の世帯主ほど高い比率でポノ留学の経験を有している事実が読みとれる。それと共に、やはりチャナ郡への留学が圧倒的に多い事実もわかる。表中の70才以上に留学経験者がいないが、これは戸主を調べたものであって、村の70才以上の老人がすべてポノを知らないわ

⁶⁾ リアン (rian) は、南タイで米の収量を測るために用いられる単位であり、直接にはひとくくりの稲穂を意味するが、通常約1kgに換算されている。

所	f在地	年齢層	20	30	40	50	60	70	計
	ド ー ン・	キレク	3						3
ソンク	同 クロナムカバーン	ン ル ク チャーイ トラップ サ ー イ	4	7 1 6	1 1 1	4	1 2		12 8 7 1
ラ ー 県	ハ ジ ャ サ ダ チ ャ ナ タ ウ	イ 郡 オ 郡 ナ 郡 イ 一郡	3	5 2 12 1	1 1 13	2	1		16 3 31 1
他県	<u> </u>	ニ ー 県タマラート県スター	2	2	1 1 2				5 1 2
	計	(A)	17	36	22	9	6	0	90
	同年齢層総 -A -B × 10		77. 3	58 62. 1	3 6. 7	25 36. 0	30. 0	0	196 46. 4

表6 年齢層別ポノ留学地分布

表7 ポノ留学者の留学期間統計

留学期間(年)	1年未満	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10年以上	不詳	計
事 例 数	12	15	17	20	4	11	1	1	2	1	 1	5	90

けではない。それでも、別個に70才以上の老人を面接してこの点を調べてみても、ごく例外的 にのみボノ留学経験者と出会うのは事実である。

なお、表中のポノ留学経験者90人中、場所を変えて2箇所以上で学んだ者は3人でしかなく、その内1人が3箇所で学び、残る2人が2箇所で学んでいる。ボノでの学習を続けた年数(端数の月数は四捨五入している)を同じ90人について調べた結果が表7である。留学期間は、3年間が20例でもっとも多く、続いて17例の2年間、15例の1年間となっている。最短期間はわずか15日間、最長期間は11年である。

次に、世帯主の世代を離れて、筆者が調査のため現地滞在当時に、ドーン・キレクから村外のポノに留学中であったものの数を調べてみた結果、総数42名という数字を得た。その42名についていくつかの共通の特徴を求めてみたところ、以下のような諸傾向が顕著に読みとれた。

第1に、留学中のものを性別でわけると、男子39名、女子3名で、男性が圧倒的に優勢な数字を示した。

第2に、年齢幅をみると、おおむね15才~20才の幅におさまる(内訳は15才7名、16才12

名,17才4名,18才7名,19才3名,20才3名とわかれる)。これ以外は13才,14才,21才,30才がそれぞれ1人ずつ,および特異な事例として75才と73才の夫婦一組がいる。この高齢の夫婦は、いっさいの家産を次世代に相続させおえたあと、家を出て、あるポノで居住をはじめたケースである。いずれにせよ、圧倒的多数が、結婚適齢期に至らない年齢層にあることがわかる。(30才の男が1例得られるが、この男は7年継続して留学を続けていて、まだ未婚である。)?

第3に、きょうだい間順位を調べると、長子が圧倒的に多いことがわかる。老夫妻一組を除いた残り40名についてこの点をみると、きょうだい間順位1位が29名(うちひとり子は1例でしかない)、そうでないもの11名(うち末子4名)という結果をえた。末子4名はいずれも2人きょうだいの末子で、すべて姉が既婚で両親とともに家に留まっているという家族構成をなしている。

第4に、この40名のすべてが違った家族から出たものである。つまり、ポノ留学へは、どんなにきょうだい数が多くとも、1戸から1人だけしか送られないという限界性が顕著にみられる。

第5に、留学継続年数をみると、全42例中、最高7年で、5年が6名、4年も同じく6名を数える。留学先は、いずれも県内に限られ、チャナ郡13名、ハジャイ郡12名、サダオ郡5名、残りの12名はいずれもドーン・キレクの所在するソンクラー市郡 (amphəə mǔang) 内のポノに留学している。留学先は、特定のポノに集中する傾向が強く、チャナ、ハジャイ両郡では、特定の一つの塾にこの村から10名前後が学んでいる例をみる。

以上のような諸傾向に簡単に分析を加えるならば、上に指摘した諸点のうち第3点と第4点、すなわち一世帯単数留学および長子優勢の傾向が重要であって、ポノ留学が、家族内労働力と密接に関連していることがわかる。いわば、ポノ留学を許されるのは、世帯の経済活動を長期にわたって助けないでもすむ立場の子供でなければならない。

最後に、ポノ留学生が留学を中止する理由を簡単にみておくと、もっとも多くあげられる理由は、飽きを感じて学習を続ける意欲を失ったから (ruusǔk bǔa mai yaak rian iik)、ということであり、次には、家族の仕事を助けねばならなくなったから、という理由、さらには、結婚のため、という理由があげられる。留学中止の理由は、だいたい以上三つの事柄に尽きる。

B 経済的動機に基づく場合

経済的動機に基づいて行なわれる村外活動の類型としては、南タイ一般で問題にすべきは、

7) 塾生の留学年齢が低いことは、当然に父(母)親の年齢もある程度低い事実を暗示する。事実、ポノ塾生をもつ世帯の戸主の年齢は、以下のように、35才~49才の幅におおむねおさまっている。

年齢	35~37	38~40	41~43	44~46	47~49	5 0~ 52	5 3~ 55	56~ 58	59以上
人数	4	10	4	7	6	0	3	2	4

(1)都市部への通勤 (2)日帰りできないほどの遠隔地に所在する物品売買市場 (talaat nat) への参加 (3)遠隔地での無断耕作 (cap coong) を求めての長期離村 (4)出稼ぎ (tham ngaan nook baan) の四つがある。このうち、ドーン・キレクでは、(1)都市部への通勤と(2)遠隔地での市場参加、の2類型はまだみられない。

1 無 断 耕 作

無断耕作とは、遊休の無主の土地に立ち入って開墾を行ない、土地獲得を図りうるタイ社会固有の慣行をいう。ドーン・キレクの現存世帯のうち、20世帯ほどが無断耕作の経験を有している。無断耕作を行なうためには、遠隔他郡ないし他県に長期に赴いて「出作り(tham nam)」を行なわねばならない。しかし、無断耕作については、別の機会に詳説した(拙稿「南タイの土地所有」参照)のでここではそれを改めて検討することは避けて、とりあえず残る一つの類型、出稼ぎだけに議論をしぼってみたい。出稼ぎとは、いうまでもなく、遠隔地に赴いて、長期間にわたって労働力・技術を提供し、相当の報酬を得る被傭用の体験を指す。

2 出 稼 ぎ

ドーン・キレクの5聚落のうち、第1、第4、第5の3聚落計201世帯の世帯主(調査不能3名)に、出稼ぎ経験の有無を問うた結果を表示してみよう。表8は、現在の年齢層別・経験職種別にわけたものであり、表9は、出稼ぎを行なった当時の年齢による分類である。出稼ぎ経験者は、198名中40名を数える(比率20.2%)。

これらの表から、ドーン・キレク村民によって行なわれる出稼ぎのおおよその特徴がうかがわれる。

第1に、表9が示すように、出稼ぎが比較的に低い年齢のときに行なわれることが注目され うる。しかも、25才以下での経験が過半を占める。これは、出稼ぎが一時的に多額の現金を必

年齢職種	ゴム タッピング	稲刈り	森開墾	その他	計	同一年齢層総数
$21 \sim 25$	3				3	8
$26 \sim 30$	6	1		2	9	21
$31 \sim 35$	6	2			8	19
$36 \sim 40$	4	1	1		6	41
$41 \sim 45$	1	1	1		3	23
$46 \sim 50$	3			3	6	34
$51 \sim 55$			1		1	12
56 以上	1			3	4	40
計	24	5	3	8	40	198

表8 出稼ぎ経験者の年齢層別・職種別分布

要とする場合に行なわれること, とくに、婚姻年齢に達した男が婿 資金 (bia khan maak) の獲得を 目的に出稼ぎを行なうことを暗示 する。ちなみに、出稼ぎ経験者40 名について,婚姻年齢と出稼ぎ経 験年齢の対応を調べると, 結婚前 の出稼ぎ23名(内訳結婚前5年以 内8名,3年以内6名,1年以内 9名), 結婚後の出稼ぎ12名, 時

種	ゴム タッ ピ ング	稲刈り	森開墾	その他	
	9	1	2	2	Γ
	5	1	1	1	

表9 出稼ぎ時年齢別分布

年齢	ゴム タッピング	稲刈り	森開墾	その他	計
$16 \sim 20$	9	1	2	2	14
$21 \sim 25$	5	1	1	1	8
$26 \sim 30$	4	3		3	10
$31 \sim 35$	2				2
$36 \sim 40$	1			2	3
$41 \sim 45$		·			0
46 以上	1				1
不詳	2				2
計	24	5	3	8	40

期不詳および出稼ぎ反復5名,という結果を得た。

第2に、性別からいうならば、女性の出稼ぎの例は皆無である。

第3に、表では読みとれないが、出稼ぎ経験に、同一人における反復性の欠如が顕著であ る。つまり、出稼ぎを定職とするものはおらず、また複数回出稼ぎを経験したものは、40名中 3~4名(しかも主して特殊な職種に限られる)でしかない。非反復性が顕著に生ずる原因とし ては、あくまでも仮説でしかないが、やはり、婚姻もしくはポノ留学の資金獲得という独身期 における一回生起的な特定目的と出稼ぎが不可分に結びついていること、が考えられよう。婚 姻後の出稼ぎにしても、家屋改築、土地購買、メッカ巡礼という、どちらかといえば一回生起 的な特定目標との関連において生ずると考えられる。いずれにせよ、このような反復性の欠如 は、ドーン・キレク村民にとって、出稼ぎ自体がまだ必ずしも積極的な意味をもっていない事 実を示すものと考えられる。

第4に、表8をみると、ドーン・キレクにおいて、出稼ぎがまったく新しい社会現象である とはいえないまでも、比較的近年においてその頻度が高まってきている事実が読みとれる。51 歳以上の経験者が5人いるが、その内の最年長者は70才で、かれは、約50年前、タイとマレイ との間をつなぐ鉄道が敷設された時に、パダンベサー付近で敷設工事の人夫として働いた経験 をもつ。ドーン・キレクに現存する者の記憶に残る例として、これが出稼ぎのもっとも古い記 録である。8つ

第5に、表8、表9が示すように、職種の単調さが顕著であり、しかも近年出稼ぎの頻度が 高まっているものの、職種の面での変化・多様化はほとんど生じていない事実が注目される。 この点については、後で改めて詳しく触れてみることにしよう。

⁸⁾ もっとも、村の70才以上の古老から無作為に14人を選んで面接したところ、14人のうちだれ1人として 出稼ぎの経験を有していないことがわかった。51歳以上の出稼ぎ経験者5人の内,あと2人は,第2次 大戦中ソンクラー市郊外に日本軍が飛行場を建設した時に強制労働を命じられた例であって、こうして みると、やはり、かつては、ごく特殊なケースとして出稼ぎ現象が生じたものと判断されうる。

ところで、出稼ぎを行なう動機は、すでに暗示したように、一時的に多額の現金収入をねらう経済的動機である。もっとも、40名の出稼ぎ経験者にその動機をきいてみると、圧倒的に多かった答えは「かねが欲しかったから」ということであったが、それ以外に、40名中10名が、「遊びに出たかったから(phro yaak pai thiao)」という答えをなした。しかし、これも、実は主たる目的は現金収入であって、付随的動機として"pai thiao(遊び)"あるいは"thoong thiao(見物)"が意図されたものと解釈すべきであろう。

独身時代の出稼ぎが多い以上、出稼ぎと土地保有その他家計面での統計との相関性を求めることは必ずしも妥当ではないし、また求めることが技術的に難しくもある。しかし、一、二注目すべき特徴を指摘するならば、もっとも注目に値することは、出稼ぎ経験者を含む家計40世帯のうち、調査時段階で小作ないし無断耕作を行なっているものが23戸を数える事実である(小作のみ15戸、無断耕作のみ5戸、小作・無断耕作を兼ねるもの3戸)。9 この事実は、出稼ぎを強いる現実的事由として、やはり出稼ぎを行なうものの属する世帯における、現金収入につながる種類の土地保有の過少性が問題になりうることを暗示しよう。しかし、土地相続にもっとも重要な意味をもつきょうだい問順位を調べてみても、特定順位との高い相関性は得られない(全40名中長子は10名、比較的高い順位にあるもの6名、これにたいして末子が12名を数える)。ただ、きょうだい総数が4人以上(ドーン・キレク平均は3人)のものは、27名を数える。出稼ぎが、比較的長期間、家族内労働力を削ぐ性質のものである以上、この数字はいたって穏当なものであろう。ひとり子の例を40名中3例みるが、その3人とも結婚後に出稼ぎを行なっていることは、家族内労働力の余裕がある程度の意味をもつことを裏書きしていよう。

これらの分析から、いちおうは、一、二の要因が出稼ぎ現象と関連するものとして浮かびあがってくる。すなわち、現金収入目的で利用・処分できる動産・不動産の絶対量の少なさ、それと家族内労働力の余裕、などである。しかし、ドーン・キレクの現状からは、まだこれらを確実に検証することはできず、まだ仮説的憶測の域にとどまる。

出稼ぎについて、動機と並んでだいじな問題は、出稼ぎを可能にする外部的条件、すなわち機会源である。しかし、機会源は、ドーン・キレク村民の体得している技術の態様に応じて相対的に定まる事柄である以上、ここで、村民の出稼ぎにみられる職種上の特徴をみてみなくてはならない。

職種の単調さについては先に指摘したが、(1)ゴムのタッピング(tat yaang)、(2)稲刈り(kiao khaao)、(3)森林開墾 (thaang paa)、(4)その他、とおおよそ4種類にわけて考えることができる。「ゴムのタッピング」とは、ゴムの木に切り込みをつけてゴム液を採集する作業をいう。これは、雨期を避け、早朝に行なわれねばならない。「稲刈り」に関して注意すべきは、ドー

⁹⁾ ちなみに、当面問題にしている総世帯数201戸のうち、小作農家総数は41戸である。もっとも、小作といっても、すべて自小作あるいは自小作貸出農家である。措稿「南タイの土地所有」p. 21参照。



写真6 ドーン・キレク村民の行な う稲刈りのやり方。



写真7 父親が作ったおもちゃの道具で田の耕 し方を学ぶ幼い子供たち。この年頃か ら,各種技術の習得が始まる。

ン・キレク地方では、中部タイの稲刈りと違い、稲 穂のみを特殊な用具でつんでこれを行なう(写真6)。 「森林開墾」は、無主・未開墾の密林を、なんらか の手段でそれを獲得所有するに至ったものの依頼に

応じて、開墾を行ない、耕作可能な土地に変える作業を指す。

村民のライフサイクルの上で、これらの技術は、子供が10才に達した頃から、まず田植(dam naa) のやり方を手始めに、逐次親が子供に教え込み、14,5才に達する頃には、おおよその技術を習得しているのがふつうである(写真7)。現在のところ、村民の有する技術の態様には、古来のやり方となんら変わったところはないという。

以上三つの職種以外の「その他」としては,表8に示されているように8例を数えるが,その内訳は,鉄道工夫2例,ソンクラー飛行場建設工事人夫2例,道路工夫1例,セメント作業(kaan-tham siiment)1例,自動車運転2例となる。この内,鉄道工夫は,先に述べたように,ドーン・キレクの出稼ぎとしては現在もっとも古い例で,2例とも約50年前に行なわれたものである。次にくる飛行場建設は,これも先に触れたが(注8参照),1942年,日本軍の進駐後,強制的に労役提供を求められて,村から2人の男がカムナンによって選ばれて送られた例である。道路工夫は,今から6年前に40才の男が,他郡にて,2カ月間だけ道路敷設工事の雑役人夫として働いた例である。

注目すべきは、1 例あるセメント作業と 2 例を数える自動車運転の例である。セメント作業の例をみると、セメントを用いてブロックや煉瓦などを作る技術を有する男が、各地に招かれて、セメント工事を行なう例である。この男は、セメント造りの技術を、2~3年前に、近くの町(ソンクラーおよびハジャイ)で修得している。そして、ドーン・キレクの所在する行政村tambonには、この種の技術を有するものは他におらず、そこでこの行政村内外の各地でコンクリートの小規模な建築作業を行なう機会に恵まれている。ドーン・キレク生まれで、系譜上

別段特徴的な点はみられない。

他方,自動車運転の例をみると,まず4年前に1人の仏教徒(調査当時30才)が村の娘と結婚してムスリム化し,村に定住した時に始まる。この男は,結婚後,中古の小型バスを1台入手し,これを運転して,各地に人や物を運ぶことで生計をたてるようになった。その後,これにならって,ドーン・キレク出身のもう1人の男がやはり小型バスを入手し,運搬で生計をたてるようになった。運送依頼は,村内からのみ来るとは限らず,村外からの依頼に応じて遠隔地に赴くことがよくある。

以上3例は,活用される技術内容の特異さと出稼ぎが反復性を伴っている点とでユニークである。それと同時に,一つの実例が刺激となって,他の村民が出稼ぎの内容上の可能性について,新たな展望を得る点がだいじである。¹⁰⁾ その意味では,事例数は少ないにしても,将来的観点からは測り知れない意義をもつものといえよう。

しかし、当面、出稼ぎは、まだ圧倒的に、古来の原始的な技術を村外でも活用する形で行なわれる。圧倒的に多いのはゴムのタッピングである(表 8,9)。続く稲刈りと共に、これは、マレイ半島の東岸・西岸とで雨季が合致せず、農業の年間サイクルに相異があることで可能になっている事実は否めない。出稼ぎが行なわれた地点の地域的分布を表示すると、表10のようになる。もっとも多いのは、サダオ郡であり、次いでナラーティワート県がくる。マレーシアのアロールスターまで範囲が及んでいるのは興味深い。いずれにしても、やはりイスラム文化圏にのみ限られており、しかも職種との関係上都市部への出稼ぎが皆無であるのは当然であるう。これらの諸地域には、都市在住商人(主として華僑)の有する小規模ながらもプランテ

ーションと呼びうるゴム園が多数所在し、労働力の需要はほぼ日常的にあると考えられる。タイの東北地方(phaak isaan)からの定期的な労働力流入も現象化しているが、それと競合する形で、地元民にも労働の機会が開かれているわけである。これらの機会源についての情報は、村外から第三者によってもたらされる場合と、村民が自らあてずっぱらで探しに赴く場合との二つのやり方で村民まで到達する。その比率は、ほぼ半々にわかれる。

実例をみよう。

例1 アロールスターに 4人の 男が 稲刈りに 赴いた例 (1955年頃に一度だけ)。この時は、 村外の第三者

表10 出稼ぎ地分布統計

	出稼ぎ地	件 数
ア	ロールスター	4
他	パターニー県	1
	ヤラー県	2
県	ナラーティワート県	6
	ソンクラー市郡	2
県	ハジャイ郡	4
内	ナタウィー 郡	1
r ı	サダオ郡	13
不詳	(出稼ぎ地不定を含む)	7
	計	40

¹⁰⁾ 過去 4 年間で、 ドーン・キレクの若者たちがにわかに 自動車運転免許をとることに 関心を示し始め、 すでに免許証 (bai khap khii) 所有者は 6 人を数えるに至っている。兵役経験の影響とならんで、その 男の感化も無視できないと判断される。

が村にもたらした情報に応じて、4人が連れ立って赴いた。

- 例2 ナラーティワート県に5人の男が ゴムのタッピングに 赴いた例 (1960年頃に 一度だけ)。この時は、村民の1人が村外で偶然情報を得て、村で希望者を募って5人連れ立って現地に赴いた。
- 例3 サダオ郡に2人の男がゴムのタッピングに行った例。この時,この2人は,サダオ郡 に行くと仕事があるという漠然とした噂をきいて,連れ立って村を出て,サダオ郡のあるポノの教師を訪ねて噂の真偽を確かめ,その紹介で労働者を求めるゴム園所有者の存在を知り,そこを訪ねて仕事を得ている。

ここで最後に、出稼ぎの期間と収入について簡単に検討しておかねばならない。

期間については、必ずしも正確なデータは得られないが、最長期間は継続して3年(ゴムのタッピング)、最短の記録としては15日間(稲刈り)という結果を得る。そして、もっとも多いのが2~3カ月間という期間であり、1カ月間がそれに次いでいる。比較的に期間が短いのが特徴的である。労働期間が長期に及ばない理由としては、出稼ぎを定職とするものがいず、ある水準の収入を得たら直ちに帰村すること、農閑期を利用した一時的離村の場合が多いこと、出稼ぎ現地での生活に適応しえないこと、などがあげられよう。

収入は、 職種によりまた 時代に応じて 違ってくるのは当然であるが、 ごく最近の例をみると、 ゴムのタッピングでひと月200~500バーツ、 稲刈りは(2週間単位で計算される)100~350バーツ、とかなりの幅をみる。 ゴムのタッピングの報酬は、 月ぎめ固定給の場合と出来高払いの場合とがあって、そのため収入の幅がひろがることにもなる。稲刈りの賃金差は地域の違いによって生ずる。 いずれにせよ、 きわだって魅力的な金額だとはいえないようである。¹¹⁾

C 公権力の発動に基づく場合

1 兵役(警察官を含む)

ドーン・キレクの20才以上のすべての男性について兵役(警察官) 経験の有無を調べた結果が表11である。公権力に基づく長期村外生活体験の機会としては,かつて絶対王制期に設けられた警察官徴用制度も無視できない。この制度は,1932年革命後も続行され,第2次大戦当時にもまだ行なわれたので,ドーン・キレクにも,この制度に

表11 ドーン・キレクにおける兵役(警察官)経験者統計

年齢層	兵 役	警察官	小計	同年齢層 男性人口
$21 \sim 25$	4		4	46
$26 \sim 30$	8		8	49
$31 \sim 35$	7		7	45
$36 \sim 40$	2		2	57
$41 \sim 45$	6		6	32
$46 \sim 50$	3	1	4	36
$51 \sim 55$			0	31
$56 \sim 60$		1	1	27
61 ~ 65		1	1	17
$66 \sim 70$			0	19
70 以上		2	2	33
計	30	5	35	714

¹¹⁾ ドーン・キレクの1世帯の月当り平均現金収入は300~500バーツである。

よって警察官を経験したものがいる。いずれにせ よ、タイ国の制度上、表11の兵役・警察官の双方 共、国家の徴用に基づくものであり、これを村民 は"thuk keen"と呼んでいる。

兵役に服する期間は、1年6カ月がふつうで、 最高が5年である(表12)。兵役に服する任地は、 ドーン・キレクから約16キロ離れたコホン基地の 場合が圧倒的に多く、そしてコホン以外でも他郡 であって、他県の基地に配属された例をみない。

表12 兵役(警察官)服務期間統計

期間	項目 5	、 役	警察官	dž
1年6	カ月	22	7	22
2年		2	2	4
2年6	カ月	1		1
3年	1	1	2	3
4年	:	1		1
5年	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	1	ľ	1
不詳	!	2	1	3
計		30	5	35

警察官の場合は、都市勤務が多いようである。(5例中4例)

村民の兵役・警察官の経験に関しては、制度的局面よりも、むしろその機会に展開される社会的学習の諸局面がいたって重要である。そこで、この点については、章を改めて以下の箇所で詳しく触れることにしよう。

2 服 役

公権力の発動による村外居住のもう一つの機会としては、兵役・警察官の経験以外に、不法 行為を犯して逮捕され、投獄(kaan-tit talaang)される場合が考えられる。ドーン・キレク 村民で、筆者が調査のため現地滞在中の段階でバンコクの刑務所に長期服役中のものが1人お り、またその間に、なんらかの事由で、警察に逮捕されたものの数は5人に及んだ(窃盗罪2 件、武器不法所持2件、傷害罪1件)。しかし、これらの犯罪現象を、なんらかの社会的・経 済的要因にまで還元することは避けねばならない。警察権力の側のきまぐれその他の偶然的事 由により、不法行為件数は容易に増減しうるからである。

II 村外生活体験の諸局面

以下は,以上に範疇化したいくつかの村外居住の機会を,実際経験したもののなかから無作為に適当数を抽出し,質問表を用いて,口頭で面接した結果を整理したものである。

面接対象(すべて男性)は,経験者全員を面接したかったが,技術的都合もあり,以下の数にしぼった。

(1) メッカ巡礼 13名(経験者総数19名)

(2) ポノ留学 10名(表6の90名より選ぶ)

(3) 出稼ぎ 15名(表8の40名より選ぶ)

(4) 兵役 12名(経験者総数30名)

警察官 5名(経験者全員)

そして、質問表は、筆者独自のものであり、質問項目数は、それぞれ

(1) メッカ巡礼 41項目

(2) ポノ留学 20項目

(3) 出稼ぎ 21項目

(4) 兵役・警察官 28項目

となっている(質問表をここに掲げることは紙幅の都合もあって 省略する)。 面接を行なったのは,筆者の現地調査期間(1964・7—1966・3)の終り頃,1965年11月から66年 1 月にかけてである。

1 メッカ巡礼経験者(ハジー)

面接対象は、表 2 (p. 141)の女性 5 名と男性 1 名 (例18)を除いた全員13名である。13名についての基礎的なデータは表 2 に掲げてあることが参考になろう。この13名の経験についてみてみよう。

13名とも、客船でメッカに赴いている。乗船地は、ペナン6例、ナラーティワート4例、ソンクラー、パターニー、バンコクそれぞれ1例とわかれる。いずれもメッカ巡礼専用に仕立てられた貸切り船であり、その13名の記憶に残る乗客数は1,000~3,000人の幅におさまる。船上生活は約2週間続く。船上で乗客が自前の食事を強いられた昔日と違い、最近では船で食事が供せられる。船の生活について、たいして大きい不満はきかれない。(4名のものが不満を述べたが、その内容は狭くて寝る時に窮屈な思いをした、悪臭に苦しんだ、寝る場所・食事をとる場所が不潔だった、船員が言葉を解さず意志疎通に困った、水の使用を制限された、ということであった。)船客が途中で死亡した例が意外に多く、13名中6名が死亡実例を記憶している。参考までに、記憶する6名の年齢と記憶する死亡者数を掲げると、31才2名、42才7名、45才2名、50才7名、51才3名、60才15名。死亡因はいずれも熱病(khai)である。その他、船上生活で注意すべき事柄として、村民が船の上で多くの異国人(chaao taang pratheet)と接触する事実がある。おおむねすべての者が、タイ国籍人以外に、「ジャワ人」(インドネシア人の意)、マレーシア人、華僑回教徒などと接触している。

メッカ周辺に滞在する期間は、平均3カ月だが6カ月の例を1例だけみる。現地での世話は、現地で有料ガイドが求められたり、あるいはメッカ留学中のタイ人が世話をしたりするが、タイ国から旅行会社の係員が同行し、いっさいの手配を行なう。この係員を村民は huanaa と呼ぶ。食事は自炊しなければならない。副食の材料は現地で買い求めねばならない。食事の回数は、時には日に1回に減る(ただし断食によるものとは限らない)。

メッカ周辺滞在中の経験の記憶をいろいろ求めてみると、まず特徴的なことは、地名の記憶がいたって乏しいことで、メッカおよび国名のサウジアラビアのみを記憶し、下船の地名および聖地の地名等の記憶は不正確である。かれらと同じ時にメッカに世界各地から集まった巡礼者の総数の記憶は各人はっきりしており、たとえば「百六十六万六千五百人(nǔng laan hok

seen hok mǔǔn hok phan haa rooi khon)」と見事に答える。ドーン・キレク住民がこれほど桁の多い数を数える機会は他にはごく稀であり、ふつう「万 (mǔǔn)」より上の桁にはなじんでいない。

メッカの気候については、全員が「暑過ぎる」と判断し、タイの気候のほうがはるかによいという結論を下している。しかし、メッカ地方滞在中に難渋したことがなにかあったかを問うと、3名が「気候が暑過ぎる」と答え、1名が「蠅が多過ぎる」と答えたほか、全員が「万事快適であった(thuk yaang sabaai-cai)」と答えている。現地で発病したものはわずか1名で、3日間暑さあたりを経験している。

狭義のメッカ巡礼, すなわちメッカでの一連の行を行なうことを, タイ・ムスリムは, "tham rayaahajii" と呼ぶ。その後7日間は, 妻と同行したものも同衾することは許されない (一部のものは, 7日間のかわりに, 4日間, 5日間という答えをなした)。

メッカ滞在中に関してことのほか注目すべきことは、ほとんど全員がドーン・キレクにあてて、幾通かの手紙 (cotmaai) を書いて送っている事実である。 3 通書いたもの 4 名, 2 通が 5 名, 1 通が 3 名で, わずか 1 名だけが 1 通も書いていない。 宛先は, おおむね両親であって, 弟宛というのが 1 例得られた。 興味深いことには, 字を書けないものも, 代筆を介して, やはり手紙を出している。

メッカ巡礼は、「みやげ(khoong kamnan)」という習慣を伴っている。全員が、現地で「みやげ」を求め、ドーン・キレクに持ち帰っている。主な品目をあげると、布地、帽子、タバコ入れ、水差し、果物、水(ザムザム井戸の井戸水)、めがね、香水、写真(絵葉書の類)などである。「みやげ」を渡す対象は、主として巡礼の準備段階で多額の献金をくれた親類縁者(前述 p. 144 参照)であり、約20人がふつうである。ただし、ザムザム井戸の井戸水は、なるべく多くの一般村民に分かち飲ませる風習である。

メッカ巡礼中に新たな交友関係に入ったものを求めると、友人をつくったもの10名、つくらなかったもの3名となる。友人をもったもの10名のうち9名が現在に至るまで交友関係を保っており、その範囲は、ナコーンシータマラート県やナラーティワート県などの他県にまでひろがる。すべて、同一船上で知り合ったもので、巡礼の全期間中、親しく接触している。

帰村後のことに筆を進めよう。かれらの帰村後、村民は爾後かれらの名前を呼ぶときに「ハジー (hajii)」あるいは略して「ジー (jii)」を名前の前(姓には付けない)に付けねばならない(写真 8,9 参照)。その13名に、帰村後のことについて二、三の質問をしてみた。村民の尊敬度は増したか、という質問にたいして、12名が尊敬が増したと答え、1名が変わらないと答えた。メッカ巡礼を行なったことで、自分自身はよりよい人間になったと思うか、という質問にたいして、1名が前と同じと答え、残る12名が「よりよくなった(dii khǔn)」と答えた。帰村後に経済的に難渋するようなことはなかったか、との質問にたいしては、全員が、困ること



写真8 墓地の祭り(thambun kubo)の日の墓地での礼拝で最前列に並んだ村のハジーたち。あらゆる機会にこのような特権的待遇が用意されている。

はなにもなかった、と答えた。ハジーはもっと尊敬さるべきだと思うか、にたいしては、1名(先の巡礼後尊敬度が増えなかったという答えをしたと同一人)だけが、もっと尊敬さるべきだ、と答え、残る12名は、十分である (phoo leo)、と答えている。12)

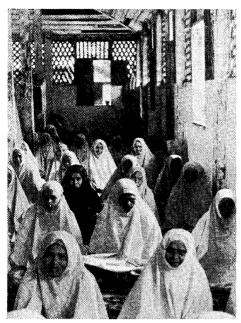


写真9 礼拝堂で礼拝する村の女性 たち。一人だけひときわ目 立つ黒衣裳の女がいるが, これがハジーである。

最後に、この13名に次の五つの質問を試みた結果を示しておこう。

- (イ) 「昔と今とドーン・キレク村民はどちらがムスリムとして立派だと思うか」
- (ロ) 「宗教を守ることに関して、ドーン・キレク住民はもっとどうあるべきだと思うかし
- (ハ) 「『1万バーツあったとしてもメッカには行かない』という考え方をどう思うか」
- (二) 「子供をメッカ巡礼に送るつもりか」
- (お) 「精霊信仰はいいことだと思うか」

まず、質問(イ)にたいしては、昔がよかったが1例、今のほうがいいが4例、変わりなしが8 例という解答が得られた。

質問向にたいしては、「宗教教育をもっと熱心に行なわねばならない」と答えるもの7名、「いい宗教学校が村にないといけない」が1名、「宗教のことを教えることのできる教師がいないといけない」が1名、「宗教を守る上での厳格さが足らない」が2名、「指導者にたいしてもっと忠実でないといけない」が1名、「もっと献金 (tham bun) をするようにならないといけない」が1名、という多様な解答を得た。

質問(*)にたいしては、「ひとそれぞれに違った考えがあってよい」が6名、「そういう考えは間違っている」が7名であった。

^{12) 2}名のものが、ついでに、「ハジー」には「いい人間のハジー」と「悪い人間のハジー」がいて、村民は「悪い人間のハジー」は尊敬しないだろう、と答えている。

質問(二)にたいしては、「子供がない」1例を除いて、全員が「送りたい」と答えた。 質問(点)にたいしては、1名が「かまわない」と答えた以外、12名が「よくない」と解答した。

2 ポノ留学経験者

面接対象に選んだ10名のポノ留学経験者についての基礎的なデータは,表13にまとめて掲げてある。10名が経験したポノ生活の態様は,おおよそ前章で詳説した通りであるので,その点についての面接結果を紹介することは避け,ただ一,二重要な点を補足的に指摘しておくに留めよう。

事項	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
現在の年齢	22	25	26	28	33	38	45	46	50	66
ポノ所在地	他郡	他带	他郡	村内	郡内	他郡	他郡	他郡	郡内	他郡
留学開始年齢	17	13	14	18	17	18	11	16	13	11
留学年数	1	2	5	2	4	5	5	2	10	4
留学ポノ数	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2
兄弟間順位	1/7	1/5	6/6	2/3	1/4	1/4	2/2	3/5	2/4	1/2

表13 面接対象--ポノ留学経験者(10名)

面接の結果、ポノ留学の動機としては、イスラムを深く学びたい、語学を学びたい、ということに尽きることがわかった。ポノ留学の費用(月額)は、古い時代の10バーツを最低に、最近では100~300バーツかかるという(300バーツを要したと答えたものは2名)。相当な費用である。これを支払うのは、ことごとく両親である。ポノ滞在中に帰宅するのは、月に1回平均で、少ない場合は3カ月に1回の例もみる。ポノ留学をおえた理由としては、勉学に飽きたからが5例、結婚が2名、そして家事を助けねばならなくなったから、兵隊になるため、病気にかかったから、がそれぞれ1例得られた。

ポノに留学してよかったか、また留学したことで自分がよりよい人間になったと思うか、という質問にたいしては、全員肯定的な解答をなした。しかし、ポノで語学習得等充分に知識をマスターしたかどうかに関しては、必ずしも肯定的な解答は得られない。マレイ語会話ができるようになったものは7名、アラビア語が読めるようになったものは1名(少々読める、は2名)である。

将来自分の子供をどこかのポノに送るかどうかについては、全員が送ると断定する(現に既に送っているものもいる)。子供を送る予定のポノを選定済みのものが5名もいる。よいポノの条件としては、全員が、すぐれた知識をもつ教師、をあげ、そしてかなりのものがポノの所在・環境のよさ、を望んでいる。

3 出稼ぎ経験者

面接を行なった15名の出稼ぎ経験者の基本的なデータを表14に掲げる。表に記載されていな

東南アジア研究 8巻2号

表14 面接対象---出稼ぎ経験者(15名)

事	頁	例	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
現	在の	年齢	33	34	34	35	37	37	37	38	39	42	42	42	64	64	70
何	年	前	2	6	4	15	12	2	1	5	$^{1}/_{2}$	10	20	3	2	8	50
職		種	ダツピング	ダツピング	ダツピング	ダツピング	ダツピング	ゴム植え	ダツピング	稲刈り	ダツピング	森朋墾	飛行場	稲刈り	稲刈り	ダツビング	鉄道
情	報	源	友人	自己	自己	友人	自己	父親	自己	友人	友人	自己	強制	友人	友人	自己	他人
動		機	かね	パイ テイオ	かね	かね	かね	かね	かね	パイ テイオ	かね	かね	強制	パイ テイオ	かね	かね	かね
期	F	引(年)	$^{1}/_{12}$?	?	3	?	?	$^{1}/_{12}$	$^{1}/_{24}$	1/12	$^{1}/_{12}$	$^{1}/_{12}$	$^{1}/_{24}$	$^{1}/_{24}$	$^{3}/_{12}$	$^{5}/_{12}$
月		戸均	100	200	200	100	100	?	500	350	300	500	18	350	100	?	18

い事柄について、いくつかだいじな点をみておこう。

ドーン・キレク村民の出稼ぎについて特徴的なことは、単身で赴くことは少なく、たいてい同行者を求める点である。近隣諸他村落からも同行者が伴い、多い場合には20名がつどいあって現地に赴いている。同行者は、おおむね「近い間柄の友人(phǔan klai kan)」である。

タイ語文化圏を離れ、マレイ語圏に赴くことが多いため、多くの出稼ぎ経験者が通訳を介して現地人と意志疎通を行なっている。現地での寝泊りは、雇用者の指定する樹園内その他の小屋で行なう。食事は雇用者が提供することは少なく、たいてい自炊を強いられる。しかし、時に雇用者の負担において外食が行なわれ、料理材料が提供されることもある。現地滞在中の帰宅は、滞在がひと月以上に及ぶ場合は3ヵ月に1回の割りで行なわれ、滞在がひと月以内の場合は行なわれない。休日が与えられなかったというものが15名中3例あり、そのうち1例においては、休日には必ず集まり(pracum)があって何もできなかった、という解答を得た(これが金曜日に行なわれるイスラム特有の集団礼拝――やはり pracum という――のことかどうかはつまびらかにできなかった)。休日が与えられたもの12名中、4名が「町に遊びに出た」と答え、残りは全員「終日休養した」と答えた。出稼ぎ期間中の生活全般について、不快・不満の有無を問うと、4名のものが不満があったといい、残りの11名は万事快適であったと答えた。その4名の不満の理由は、それぞれ、報酬が少なかった、食事が臭く水も悪かった、寝泊りする場所がよくなかった、深い森の中で暮らさせられた、ということであった。

出稼ぎ現地で新たな友人を得たかどうかについて調べると、友人を得た7名、得なかった8名であった。その7名のうち現在まで交際しているものは1名である。

現地滞在中の宗教活動について、二つの質問を試みた。一つは毎日5回の礼拝 (mayan)を行なったかどうか、もう一つは、毎週金曜日正午の礼拝堂 (matsajit)での集団礼拝に必ず参加したかどうか。毎日5回の礼拝については、完全に行なったもの6名、不完全に行なったもの6名、全然行なわなかったもの3名という結果を得た。金曜日の礼拝堂行きについては、毎金曜日に近くの礼拝堂に赴いたもの2名、時々赴いたもの2名、全然行かなかったもの11名という結果になった。この結果はたいへん興味深い。とくに、南タイのムスリムが、他村落の集

団礼拝には加わりたがらない性向をもつ事実が暗示されていて、この点は別の機会に詳しく検 討してみなくてはならない。

最後に、「もしいま1万バーツのかねがあったとしたら、なににつかいたいか」という仮定の上での設問を試みた。その結果、家を新築する、が6名、ゴム園を買う、が3名、椰子園を買う、が1名、メッカ巡礼をする、が4名、わからない、が1名、という解答を得た。

4 兵役・警察官経験者

面接対象は兵役経験者12名,警察官経験者5名,計17名である。兵役に服した期間は5年間1名,2年6カ月1名(この2名はいずれも太平洋戦争中に服したものである),残りはすべて1年6カ月である。警察官の5人は,みな2~3年の経験をもっている。そして,ことごとく正式徴用期間満了(khrop kamnot)で帰村している。その期間中に与えられた主たる日常的任務について17名に問うた結果,まずなんらかの指導的立場に立ちえたものはわずか1名,副分隊長の例を得ただけであった。その他変わった任務に就いたものとしては,自動車運転手2名,らっぱ手1名,炊事夫1名,橋梁専門工兵1名があり,その他は兵舎清掃,戦闘訓練,通常の警察任務等のみを自らの任務として挙げている。

生活の諸局面についていくつかたずねてみた。休日は、もっぱら近くの町へ遊び (thiao) に出たり、自宅に戻ったりしている(各人とも月に平均1~2回帰宅している)。月給は、3 例のみ家計に入れ、残り14例は買い食いに消費している。食事について、自宅と兵隊(警察)で食べるのとどちらが美味だと思うか、という質問に対して、1 例のみ自宅のが美味だと答え、もう1 例が差がないと答えたほか、残る全員が兵隊(警察)で提供されるほうをむしろ美味だと判断している。しかし、兵隊(警察)生活と村での生活とどちらが快適か、という質問に対しては、村での生活9名、兵隊生活3名、警察官2名、差がない3名、という結果を得る。

イスラムの行(siin)の遵守度を調べるために、断食を実行したかどうかを問うてみたところ、完全に実行したもの 6 名、中途半端に実行したもの 5 名、断食をまったくしなかったもの 6 名という結果を 得た。 そして、 断食を怠った 理由としては、 腹が 空くから、 夜間に 食事 (aahaan samrap ook buat toon klaang khǔǔn) を採れるような配慮がなかったから、 仕事が激しいため、などが挙げられた。

公務上の事由で遠隔地(他県)旅行の経験を有したかどうかの点を調べると、11名が経験ありと答え、その行き先は、以下のように各地に拡がった。マレーシア2例、バンコク2例、ヤラー県4例、ナラーティワート県2例、パターニー県2例、ナコーンシータマラート県2例、サトゥーン県1例。

軍(警察)に在籍期間中に新たな友人(phǔan)を得たかどうかを調べてみると,14名が得たと答えた。しかし、現在までの交際を続けていると答えたものは、その14名の内6名でしかない。また、その間に偶然接する機会をもった、軍隊(警察)のもっとも高い階級のものはだ

東南アジア研究 8巻2号

れであったか、と高官との接触体験を求めると、元帥(ピブーン・ソンクラーム)との接触1 名、将官2名、佐官5名、尉官8名、その他1名とわかれた。

次いで、この17人の退役後の意識の傾向について二、三きいてみた。まず、兵隊(警察官)になる前となった後とで自分が良いほうに変わったと思うかどうかの間にたいして「変わらない」が1名、「兵隊にならなかったほうがよかった」が1名、残り15名はみな「よくなった (dii khǔn)」と答えた。兵隊(警察官)になってよかったかどうか、またその理由は、との間にたいしては、同じく、「よくも悪くもない」1名、「ならないほうがよかった」1名、残り15名は、「なってよかった」と答えた。理由は、否定的な解答としては、「自分の家の仕事ができなかったから」が挙げられ、肯定的な解答としては、

- 世の中の重要な事柄がわかった
- 仕事の技術を身につけた
- 偉い人 (phuu yai) と知り合えた
- 重要な場所 (sathaanthii samkhan) となじむことができた
- ・知識が増えた
- ・鉄砲の扱い方を学ぶことができた
- ・位階 (tamnεεng) の高低のことを知った
- ・役人の肩書を覚えた
- ・世の中の規則や規律 (rabiap-winai) を学んだ

などが得られた。退役して村に戻ったあと、村民は尊敬する(napthǔǔ)ようになったかどうか、にたいしては、10名が村民が従来以上に尊敬するようになったことを認め、7名が変わらないと答えた。

最後に、兵役、警察制度についての価値判断を求める二、三の質問を試みてみた。まず、兵隊(警察官)が好きか嫌いか、という端的な質問にたいして、好き、が11名、好きではない、が6名という解答を得た。兵隊(警察官)になることはいいことだと思うか、という質問にたいして、いいことではない、が2名、いいことだが自分は二度となりたくない、が1名、残りはすべていいことだと解答した。なったほうがいいとする理由を求めると、

- ・国家 (pratheet-chaat) を助けるから
- ・知識が増えるから
- 世の中の規則や規律がわかるから
- 鉄砲や自動車の扱い方を学べるから
- 頭がよくなるから
- 他人から名誉 (kiat) の持ち主と認められるようになるから
- ひとと知り合えるから

- 他人から怠け者とみられずに済むから
- ・月給をもらえて、働かずに済むから
- ・国家政治(baanmùang)の変化がよくわかるからなどが挙げられた。

おわりに

以上で、ドーン・キレク村民の村外生活を体験する主な諸機会源と、その体験の諸局面についての素描をおえたい。

これまでとりあえず三つの範疇にわけて論じてきたが、これまでの検討の結果に応じて、それらを、別の視角から、こんどは二つの範疇に整理し直して考えることができるように思える。

まず第一に、宗教的動機に基づく諸機会源は、これを保守的範疇として捉えることができる。「保守的」というのは、この場合、伝統的文化規範の維持強化を旨とし、またそれに基づく宗教秩序・社会秩序の安定的維持を予定する傾向をいう。すなわち、それは、イスラム社会の宗教的権威の安定を軸にして、ドーン・キレクの村落社会の権威関係を、変化を媒介とせずに「保守」しようとする価値観につながる。

先に指摘した"thaana"の意識自体が、いたって保守的な秩序維持を前提とする意識構造を秘めている。この点については、改めて説くまでもなかろう。メッカ巡礼にせよ、ポノ留学にせよ、両者ともある種の地理的移動ではあっても、社会経済構造の変化に対応する形での流動化現象ではなく、いわば制度的儀礼でしかない。移動の様式自体が固く制度化されているわけで、その点での変化発展性にはさらさら乏しい。それらは、多くの儀礼とステレオタイプ化した心理構造に伴われていて、この儀礼内包的・ステレオタイプ的性格の故に、移動が行なわれれば行なわれるほど、それらの保守的性格は強化されることになる。要するに、社会関係様式と経済様式の無変化を前提とし、しかもその無変化を永続せしめようとする性向を秘めている点に、これら保守的範疇の特徴と問題点があるといえよう。

次に、残る2種の機会源、すなわち経済的動機に基づくものと公権力の発動に基づくものとは、いわば非保守的範疇としてまとめて考えることができる。

この非保守的範疇は、一口でいうならば、ともすればイスラム的権威秩序の枠によって開放性を失いがちなドーン・キレクを、「開かれた社会」に変えうる契機を秘めている点で大きな意味をもっている。

第1に、出稼ぎにせよ、兵役にせよ、双方とも土地の生産性にのみ依存する伝統的な経済様式とはまったく異質な経済行為であって、将来的観点からは大きな意味をもっている。出稼ぎは、まったく無縁の第三者に労働力を提供し、その見返りに相当の報酬を得る行為であるが、

それをドーン・キレク村民が多数経験し、いわばそれにすでになじんでいる事実はだいじである。それとともに、兵役は、村民が契約に基づく固定給料による生活を経験するユニークな機会として注目に値しよう。いずれにせよ、これらの機会源を通じて、被雇用という新しい可能性にドーン・キレク村民が開眼することはたいそう重要なことである。

第2に、それらの機会源は、ムスリム村民が宗教的儀礼をネグレクトすることをむしろ助長している事実に注目しなければならない。面接の結果が示すように、礼拝や断食などイスラム五基の大切な行を、出稼ぎ経験者や兵役経験者はかなり怠っている。そして、怠ったことにたいして、具体的な事由をあげて「やむを得なかった」として正当化しようとする態度で臨んでいる。この点、ハジーたちが、ドーン・キレクの宗教的権威の維持に強い関心を示すのと好対照である。たんに行を怠たるだけではなく、これらの経験者が新しい価値志向を潜在せしめているのは注目に値する。すなわち「1万バーツあったとしたら、なににつかうか」という質問にたいして、本来ならばいわば教義問答的にはね返ってくるはずの「メッカ巡礼に行く」という解答がむしろ少なく、非宗教的な願望が率直に述べられた事実がそのことを暗示している。

第3に、メッカ巡礼などがドーン・キレクと別の異質社会との融和化にほとんど貢献しないのにたいして、兵役経験や出稼ぎ経験は、ドーン・キレクを異質社会と結びつけるうえで少なからざる媒介項として働いている。なるほど、メッカ巡礼の場合にも、社会的通信の観点からみるとある種の注目すべき現象に伴われてはいるが、手紙を出すという風習にしても、交友関係の拡がりにしても、親子関係あるいはハジー同志の関係というごく限られた社会関係で生ずることでしかない。それにたいして、たとえば兵役は、通婚圏拡大の重要な契機として働くのである。ドーン・キレクと遠隔地との通婚は、かなり兵役が媒介しているし、そして時には仏教徒がムスリム化してドーン・キレクに定着する契機ともなっている。それと同時に、ドーン・キレク住民が、タイ国社会というより大きな社会枠と心理的に親和する契機として、兵役は決定的な意味をもつのである。いまかりに、「政治的近代化」ということを、権威のイメージの変化として捉え、次のように要素分析してみよう。

- 1. 権威を措定する範囲の拡大
- 2. 権力の要素分析を行ないうる能力の増大
- 3. 権力を、よかれあしかれ、評価する能力の増大
- 4. 権威のイメージと公権力階梯との関連づけ
- 5. 権力とは接触すべきものだという観念の成立

もし「政治的近代化」がこのような内容をもつものであるとしたら、ドーン・キレク住民がその方向に政治的啓蒙を受ける機会が、正に兵役経験によって与えられているのである。そのことは、兵役(警察官)経験者の面接結果がはっきり示している。いずれにせよ、兵役経験を介して、ドーン・キレク村民は、多かれ少なかれ、タイ国社会と同化しているのである。

第4に, 先に述べた保守的範疇のほうが, 技術導入の契機としてはまったくなんの役割も果たしえないのに反し, 出稼ぎ, 兵役経験などの非保守的範疇は, 村に新しい技術や文化様式を導入する点でたいへんだいじな役割を果たしている。自動車運転の技術など好個の例である。出稼ぎに関していえば, まだ目下のところ, 村固有の技術様式と水準とでもって通用する職種のみが村外に求められているが, ある段階まで至れば, 間違いなく, 新たな技術習得を通じて職種の幅を拡げるものが出現しよう。セメント工事を行なう男の出現は, その点画期的であったといえる。出稼ぎにせよ, このように, 技術導入の契機として, 無限の可能性を潜めているのである。

このように、村民の村外遠隔地生活体験を保守的なものと非保守的なものとにわけて考えてみると、今後注目しなければならない問題点は、二つにしぼられてくる。第1のテーマは、土地経済の行き詰まりが保守的範疇の地理的移動にどういう影響を及ぼすか、であり、第2のテーマは、非保守的範疇が今後どういう進展をみせるか、ということである。

筆者の関心をひくのは、第1のテーマよりむしろ第2のテーマである。けだし、非保守的範疇こそ、ドーン・キレク社会の近代化をうながす重要な要因を多く秘めているからである。

今後留意しなければいけないのは、やはり出稼ぎ現象がその頻度と職種においてどう変わっていくかということではなかろうか。兵役のほうには、格段の変化を望むことはできない。出稼ぎ現象に変化が生ずるとしたら、論理的に想定するならば、それはまず出稼ぎの反復性の強まり(つまり同一人における出稼ぎ回数の複数化と頻度の増加)に向かうであろうし、次いで、職種の多様化、つまり村民の備える技術的対応の幅の拡がりが生ずるであろうし、はては、出稼ぎが都市部においても行なわれることも考えられる。

しかし、その場合、やはり出稼ぎ現象をうながす社会的・経済的条件を考えておかねばならない。ドーン・キレク村の内外においてそれらを捉えておく必要がある。村内に関していえば、土地経済の安定度いかん、貨幣経済による圧迫度いかん、そして宗教的保守性の度合い、などの局面がある。村外に関していえば、出稼ぎ労働力の需要自体がやはり重要である。都市部の経済が華僑による前期資本主義的商業資本活動に留まる限り、都市部において大量の労働力需要が発生するとは考えられない。さりとて、非都市部においても、たとえばプランテーション地域で労働力需要があったとしても、もしその需要が大きければ大きいほどよりまとまった労働力供給源が求められることになり、その場合はむしろ東北タイや中部タイからの人口流入のほうが蓋然性が高いことになる。それでも、出稼ぎの散発的機会源は各地に求められうるわけで、ドーン・キレク住民の適応力の水準しだいでは、外部的条件は比較的に熟していると判断できるのである。

適応力(adaptability)の問題も、多局面的である。少なくとも、心理的局面、文化的局面、技術的局面の三つにわけて考えねばならない。心理的にみると、ドーン・キレク住民が、先の

東南アジア研究 8巻2号

面接結果から読みとれるように、かなり気楽に外地に適応しえていることがわかる。そこで、 問題はやはり文化的適応性と技術的適応性にしぼられる。文化的には、イスラムという宗教の 枠が大きい。それとともに、言語の障害もある。技術的にも、まだ固有の技術水準は幅が狭い という意味で低く、さほど適応性が備わっているとはいえない。

結論的に判断して、もしドーン・キレク村内の経済状態がある世代でひっ迫して出稼ぎの度合が高まった場合、その段階でどれほどの適応力を村民が備えているかによって、かれらの生活の安寧は大きく変わることになろう。しかし、問題は、村民にとって適応力を体得する機会は、ほかならぬその出稼ぎの機会自体であるという事実である。この皮肉なパラドックスを止揚する手掛りは、いまのドーン・キレクにはまだない。